

2 炎峰青年会の設立と洪元煌

台湾総督府警務局は、1939年に出版した調査報告において、1920年代初期の台湾文化協会の設立が台湾各地の青年層に大きな影響を与えたと指摘している。代表的な地域青年団体として、台北青年会（1923年7月30日創立）、美麗也会（基隆市、1926年5月6日）、通霄青年会（1925年10月3日）、炎峰青年会（1924年10月28日）、大甲日新会（1926年1月10日）、および彰化婦女共励会（1925年2月8日）、諸羅婦女協進会（1926年7月）が列挙されている¹³。これらの外郭青年団体の中でも、最も活発に長期間にわたって活動したのは草屯炎峰青年会であり、その創設者は台湾文化協会理事の一人、洪元煌であった。当時台湾民族運動の中心人物の一人だった葉榮鐘は、戦後に著述した『日抛下台湾政治社会運動史』の中で、1924年10月28日に南投郡草屯莊（現在の南投県草屯鎮）の文化協会理事洪元煌と李春喙が提唱した炎峰青年会は「文化協会陣営のなかでも最も有力な精鋭部隊」であると賞賛している¹⁴。後述のように、文化協会だけではなく、1927年に文化協会が左派と右派に分裂した後も、炎峰青年会は右派の台湾民衆党と台湾地方自治連盟の地方支部と連携して、依然として台湾人の政治、自治運動の「最も有力な精鋭部隊」であり続けた。では、この精鋭青年団体はいかなる役割を果たしていたのか。植民地統治者との間において、接近と離反を繰り返す中、どのように協力と抵抗の微妙な関係を維持していたのだろうか。

(1) 中国近代思想家梁啓超と陳独秀らの影響

後述のように、1920年代、台湾文化協会は設立以後、一連の文化啓蒙運動を展開した。洪元煌が率いる草屯炎峰青年会に集結した地域の「四大姓（李・洪・林・簡）」の青年世代の主要成員は、1910年頃の碧山吟社時期にすでに親密な同志となっていた。たとえば同族の洪清江、李姓同族の李春盛、李春喙と李春塗兄弟は、最も重要な人物であった。研究者がすでに指摘しているが、樸社と台湾文化協会の民族運動が表裏一体の関係にあるように、草屯地域の碧山吟社と炎峰青年会の民族自治運動も表裏をなして互いに関連していた¹⁵。

総じていえば、若い洪元煌は漢詩をもって、南投・台中・霧峰・鹿港など、中部地域のいわゆる台湾文化中心地の文人と交流していた。この間に起きた重大事件として特記すべきは1911年4月の中国近代著名思想家で文人の梁啓超の台湾訪問である。梁啓超は招聘を受けて台湾を訪ね霧峰林献堂の菜園を訪問した。現存の文献資料から、洪元煌が梁啓超の歓迎会に出席したか否かは確認できない。だが、洪元煌も深く感銘を受けたのは明らか

13 台湾総督府警務局編『台湾社会運動史』（原台湾総督府沿革誌第二編、領台以後治安状況〔中巻〕、東京：龍溪書舎復刻版、1973年）166～167頁。

14 葉榮鐘『日抛下台湾政治社会運動史（下）』（台北：晨星出版、2000年）365～366頁。

15 陳文松「伝統士人から『近代青年』までの文化交錯と転換——『不倒翁』洪元煌と草屯碧山吟社」（『臺灣古典文學研究集刊』創刊号、台北：里仁書局、2009年）289～343頁。